經濟論叢

第七十五巻　第二號

財政と價値問題……大　畑　文　七（1）

2つの體制間の貿易關係について……森　田　桐　郎（19）

寄生地主制の形成過程……内　藤　正　中（39）

ヴェ・イ・レビエヂエフ「17—18世紀のロシアにおける農民諸運動の性格に關する問題によせて」……福　冨　正　實（61）

〔昭和三十年二月〕

京都大學經濟學會

ヴェ・イ・レビェヂェフ

『一七—一八世紀のロシアにおける農民諸運動の性格に關する問題によせて』

В. И. Лебедев
К ВОПРОСУ О ХАРАКТЕРЕ КРЕСТЬЯНСКИХ ДВИЖЕНИЙ В РОССИИ
XVII-XVIII вв.
《ВОПРОСЫ ИСТОРИИ》1954. Но 6.

福富正實

イ・ヴェ・スターリンが一九五二年に發表した『ソ同盟における社會主義の經濟的諸問題』が、その後の社會科學の諸研究に極めて大きな貢獻をもたらし、「マルクス＝レーニン主義科學の發展に新段階を印した」(『恒久平和と人民民主主義のために』論說) ことは、例えば、ソ同盟の學界における最近の幾多の新しい成果が示している。ここに紹介するレビェヂェフの論文は、その內容がかなり壓縮されているために、我々がそれをすつきりと理解するには簡潔過ぎるといううらみもあるが、それにも拘らず、農民戰爭に關するソ同盟の歷史學界の動向を知る上には極めて重要な參考となることは疑いないであらう。スターリンの勞作の意義について次の如く述べつつ、レビェヂェフは農民戰爭に關する從來の諸研究の缺陷を指摘する。——

『マルクス主義と言語學の諸問題』ならびに『ソ同盟における社會主義の經濟的諸問題』と題する諸勞作の中で、イ・ヴェ・スターリンによつて具體化され、發展せしめられたところの、封建制のもとにおける經濟外强制に關する問題・封建制の

『一七—一八世紀のロシアにおける農民諸運動の性格に關する問題によせて』

時代における商品生産の役割と地位に關する問題・生産諸關係に生産諸力の性格に必ず照應しなければならないという法則に關する問題・についてのマルクス—レーニン主義的諸命題は、農民諸戰爭の研究にとつて巨大な意義を持つている。

「農民諸戰爭の考察に際して、今までには次の如き重大の誤謬が存在している。

一、封建社會における階級鬪爭が、生産諸力の發展と、生産諸力に照應するこの社會の生産諸關係の性格に殆んど連關なしにか、もしくは、それらと切り離されてさえ考察されている。この深い方法論的誤謬は、絶對者に、卽ち、生産諸力と生産諸關係の發展の決定的な力に、階級鬪爭が壓せられる、ということに導いている。

二、封建的土台に奉仕する上部構造である封建國家が、土台と切り離されて考察されている。その結果、經濟外强制の强化が反封建的農民諸戰爭の主要な原因である、と誤つて考える。ところが實際には、經濟外强制の强化は、封建制のもとにおける人民諸蜂起の・あれやこれやの時代における・間接の發生原因であるに過ぎないのであつて、主要な原因の役割を果しているのは、生産諸力と、生産諸力に照應する生産諸關係のより一層の變化の結果としての、一八世紀後半期における封建—農奴制的體制の危機の進展と深化なのである。

三、この問題に關しての筆者自身の一連の論文をも含む多くの勞作の中では、ロシアにおける一七—一八世紀のあれやこれやの諸蜂起の諸前提が、この時代の生産諸力と生産諸關係の發展に連關されずに、そして、あれやこれやの諸蜂起に先行する諸時代におけるロシアの封建制の、具體的—歷史的な諸特質の考慮なしに、一般的な文句で特徵づけられている。」

かくして、彼は次の如く結論づける。——

「これらの誤謬の根源は、經濟外强制の役割・反封建的農民諸戰爭の運命における上部構造的諸要因・の過大評價の中に、そして、土台的制度の諸現象の過小評價の中に存するのである。」

周知の如く、封建制のもとでは、生産諸關係の基礎は、生産手段に對する領主の所有と、生産從事者—農奴に對する領主の不完全な所有であるが、領主階級が基本的な支配階級であつたのは、彼等が土地の如き生産手段の所有者であるということに基因する。生産體系における領主の經濟的に支配的な地位の力によつて、彼は生産從事者—農奴に對する不完全な所有を實現したのである。封建的生産樣式は、その最初の段階では自然經濟の上に安住している。だが商品生産の比重の增大とともに、領主經濟の市場への從屬は、地主たちをして現物地代より貨幣地代へ移行することを余儀なくさせた。（この地代形態推轉の過程の、ロシアにおける構造的特質については、飯田貫一氏『ロシヤ經濟史』四五—五三頁を參照されたし。——紹介者）

この過程は封建經濟の解體を助成した。自然經濟の完全な支配のもとでは、領主たちによる農民搾取の可能性は一定の程度にまで制限されていたが、この時代にあつてはその可能性は著しく増大し、このことが封建的抑壓の鋭い強化を伴う。農民戰爭は、かかる抑壓に反對する「被壓迫農民層の最高の鬪爭形態」である。マルクスはロシアの農民戰爭について、「農民の土地への最も苛酷な緊縛」と、増大しつつあつた封建的抑壓がステパン・ラージンの蜂起に先行したと敎えつつ、「土地所有者と勞働者の間の諸關係」をラージンの蜂起の主要な原因の一つとして區別した。彼の言葉によれば、「一七世紀のすべての半期はステパン・ラージンの時代の準備であつた」。(註1) 周知の如くエンゲルスは、一五二五年のドイツ農民戰爭はブルジョア社會がやつと誕生したばかりの近世初頭に發生したにも拘らず、一八四八年のブルジョア革命の先驅者である、と考えた。「封建制の廢止は、積極的に表現すればブルジョア的狀態の樹立ということである。」(註2) 卽ち、エンゲルスは「農民戰爭の客觀的傾向」を考慮したのである。このように考察した後に、レビェヂェフは次の如く規定する。——

「農民戰爭」という名稱は、領主＝土地所有者たちに反對する農民層の廣汎な市民戰爭のことをいおうとしているのである。かかる廣汎な農民戰爭においては、村落共同體の孤立性・個々の農民動搖の局地的性格・が克服されうる。卽ち、農民層はすべての地主＝土地所有者階級に反對して行動する。」

(註1) 『マラダーヤ・グヴアルヂイヤ』誌 一九二六年第一號 一〇七—一〇九頁。マルクスは『資本論』第三卷の土地所有諸關係の資料として、ロシアの農民戰爭の歷史を調査した。『ステンカ・ラージンの一撥』と題するェヌ・コストマロフの論文についてのマルクズの詳細な概要は、一九二六年に始めて發表された。

(註2) エンゲルス 『ドイツ農民戰爭』 邦譯 國民文庫版 二一頁。

この「農民戰爭」という術語は、上述の意味において、封建＝農奴制的なロシアにおける一七—一八世紀の反封建的農民運動に適用しうる。ロシアの農民戰爭においてはドイツと異つて、領主たちとの妥協は典型的とみなすことはできないで、宗教的色彩ではなくツァーリスト的傾向を帶びていた。更に、ツァーの政府の抑壓に反對する非ロシア諸民族(ナロードヌスチ)體の行動と、封建的抑壓に反對する鬪爭の複雜な絡み合いが、ロシアの農民戰爭の特質であつた、とレビェヂェフは考えるのである。

いうまでもなく商品生產の比重の増大とともに、被搾取大衆が商品生產に引き入れられる度合に從つて、ロシアにおいても、諸義務負擔の拒否・農民と奴僕(ボーリ)の逃亡・竊盜・「强盜」・領主の殺害・の如き階級鬪爭の最初の形態より反封建的農民戰爭に進化する・農民層の側からの・經濟的自立のための鬪爭が重

要な意義を持つてくる。かくして、農民行動の強さは、農民搾取・農民が商品—貨幣的諸關係に引き入れられること・の度合に依存したのであるが、封建—農奴制的ロシアにあつては、すべての農奴的農民は、當時では特別の身分でもあつた特權的土地所有者階級に對して闘つた。腐朽し始めつつあつた封建的土台をぐらつかせつつ、農民諸蜂起はロシアを資本主義の軌道の上により急速に設置することを、客觀的には助成した。だが、ロシアの農民諸戰爭の社會的性格を、このことから直ちに、「小ブルジョア的」と規定してはならない。商品生産は資本主義的生産と同一視できないのであつて、農民層内部における社會的分化は、農業ブルジョアジーと農業プロレタリアートへの農民階級の分解が生じた農奴制廢止の後にのみ生じた。では、農民戰爭の客觀的意義はどこに存するのか。レビェヂェフは次の如く述べている。——

「ラージン、プガチョフ、その他の諸蜂起の基本的推進力は、次第に商品生産者となりつつあつた農民たちである。疑いもなく、諸蜂起に參加するに際しては、彼等はただ封建的搾取に反對するため、土地のためにのみ闘つたのではなく、主觀的にはこのことを意識してはいないかも知れないが、彼等は小生産と流通の自由な發展の途のためにも闘つたのであつて、商品生産と流通の增大の諸條件においては、このことは、商品生産發展のための闘爭を窮極的には意味した。」

即ち、農民戰爭の客觀的意義は、「封建的束縛から自由な・小生産者たちの發展の・途のための闘爭」にあつた。「自營農民の自由な所有は——とマルクスは書いた——明らかに……小經營のための……土地所有の最も正常的な形態である。……それは農業そのものの發展のためには、必要な一通過點である。」(註3)

(註3)　『資本論』第三卷　邦譯　青木文庫版　第一三分册一三六頁。ちなみに、レーニンは『第一次ロシア革命における社會民主黨の農業綱領』の第二章の註の中で、マルクスのこの命題を次の如く具體化している。「ここからでてくることは、自由な農民的耕作の完全な勝利は私有を要求できるということだけである。だが現在の小耕作は自由ではない。……自由な小耕作をつくりだすには、あらゆる形の封建的土地所有が崩壞し、移住が自由になる必要がある。」(邦譯　朝野勉　『レーニン農業問題』　三〇二—三〇三頁)

農民層の平常の分散性が破られることによつて、農民戰爭は封建的封鎖性を破壞して商品生産を發展させ、そのことによつて、生産諸力のより一層の發展と、新しいブルジョア的諸連關の出現に途を掃き清める諸前提を成熟させた。この分散性の克服に大きな役割を演じたのは、カザック・平民的諸分子・生産手段を奪われた者・であり、プガチョフの蜂起では——勞働者(未來の前期プロレタリアート)がそうであつた。だが、

これらの蜂起はスターリンが特徴づけている如く、(註4)「自然發生的」な性格を帶びて非組織的であり、「集中した國民的行動」(エンゲルス『ドイツ農民戰爭』邦譯 國民文庫版 一四七頁)をなすには至らなかつた。それは、決定的には當時の生産樣式の所産である封建的分裂狀態に影響された。蜂起者たちのもとには勞働者階級の如き革命的指導者が常時には存在しなかつたし、また存在し得なかつたことの中に、農民戰爭敗北の基本的原因がある。

(註4) 『スターリン全集』第一三卷 邦譯 大月書店版 一三二頁を參照。

かくして、農民戰爭敗北の原因を、封建國家の武力・法・教會・の如き上部構造的諸現象の作用の中に求めるのは正しくない。封建的支配階級は、經濟的に支配しているという理由によつて、被搾取農民層を統治している。上部構造の助けをかりて、この支配はただ鞏固化され、維持される。だが、人民諸運動の發生と鎭壓に際して上部構造が演じた現實的役割は正しく評價すべきである。封建國家の機能の弱體化等々は、地方的人民諸蜂起が反封建的農民戰爭に進化することを容易ならしめた重要な要因であつて、過小評價はできない。即ち、階級鬪爭の內面的基礎＝經濟的土台と、外部的條件＝上部構造の正しい位置づけ。そして、經濟的土台の變化を規定する生産諸力と生産諸關係の狀態の具體的＝歷史的な分析。この史的唯物論の基本的見地の正しい再認識をレビェヂェフは强調し、要求している。次に彼の分析を簡單に紹介しよう。

一六世紀後半期にロシア國家の經濟に重要な諸變化が生じた。商品生産と交易の增大・「全ロシア的市場」の萌芽の發生・に對應して、封建的な莊園(ヴォーチンニエ・ボヤーストヴェニヤイエ・ハジャイストヴォ)＝領地的經濟の再編成が行われる。大領主の莊園經濟と中小領主の領地經濟では、封建地代の形態で農民から受け取られる物質的貴重品の量を增大して、農民勞働の搾取から多大の效果を引き出す諸目的で、封建的諸義務の性格を變化させようとする傾向が見受られる。領主たちの土地所有の擴大と農民たちの農奴的隸屬の强化は、ロシアの北部諸地方(クレスチャンスキエ・ゼムリー)においてのみ維持されつつあつた「貢納義務(チョールノエ・ヂェロ)ある自由農民(クレスチャンスキエ・ゼムリー)の土地」の減小と殆んど完全な消滅の結果として生じた。これと併行して、所領地自身の內部においては領主經營(パーメスカヤ・ヴォーツニヤ)が增大した。このことは、商品生産の增大と、「直營地(パーシニヤ)の擴大・穀物生産高の增大・に對する土地所有者の利害關係」(グレコフ『ロシアの農奴制の歷史における最も主要な諸段階』)をつくりだす國內市場の增大について證明した。農民の集團的逃亡はこのような事情から生じた。生産諸力と生産諸關係のこのような發展に規定された經濟的土台の重要な變化に對應して、封建的支配者たちは經濟外强制を强化し、その助けによつて封建的土地所有の規模の增强を助成して、彼等の經濟的基礎を强めようとする。一五八一年、一五九八年の、農民を土地

『一七—一八世紀のロシアにおける農民諸運動の性格に關する問題によせて』

『一七―一八世紀のロシアにおける農民諸運動の性格に關する問題によせて』

へ緊縛する諸方策の實施は、農奴制の法律的形成の始まりを決した。この農奴制の強化＝封建反動に對しては、先づ一六〇七年にボロトニコフの蜂起が發生する。外國の干渉と國内動亂・農奴主陣營内部の矛盾等々は、蜂起の規模と威力を助成した。この蜂起は中央集權化・個々の領地の封鎖性の弱化・を助成し、一七世紀には「全ロシア的市場」が次第に發生する。これに對して、一六四九年のソボールノエ・ウロジェーニエは農奴制を法制化し、かくして農奴制の經濟的土台は、市場關係により適應した封建的土地所有形態＝地主貴族的土地所有の、この法認によつて強化された。一七世紀後半期には、領地（ヴォートチナ）（知行）の相續・世襲地（ポメーストニエ・ピムリエフラデニエ）として領地（ヴォートチナ）（知行）を下賜すること・が廣汎化し、植民が強化されて、封建的土地所有の規模の一般的增強が生じる。このような封建的土地所有者階級の經濟的基礎の補強の上に立つた農民搾取と壓制の強化は、農民層の犠牲（一六七〇―一六七一年のラージンの蜂起の鎮壓）において、地主と商人の民族國家＝ペヨートル絶對主義を成立させた（一六七二年）。ほぼ一八世紀後半期より農奴制的經濟體制は解體期に入り、「月拂い制（メシチーナ）」へ農民は移行し、莊園マニュと併行して商人マニュと農民マニュが發展する。かかる時代を反映して、プガチョフの蜂起（一七七五年）は、先行する諸蜂起よりも際立つた組織性をもつて闘つた。

（一九五四・一一・二七）